昭和48年8月1日発行（毎月1回1日発行）第22巻・第10号 昭和29年6月23日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号 昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

チャンスボート
F4Uコルセア

☆特集☆
スビック港のエンタープライズ搭載機
現代の戦闘機・強い戦闘機の12の条件
1ch用RCグライダ“フラックスワン”

'73 AUGUST

$3.00

NK
E
411
NAVY

〔上〕第97攻撃飛行隊（VA-97）のA-7EコルセアII。　〔下・右上〕第13偵察攻撃飛行隊（RVAH-13）所属のRA-5Cビジランテイ。

〔上〕第131戦術電子戦飛行隊（VAQ-131）所属のEA-6Bプラウラー。

〔左〕第143戦闘飛行隊（VF-143）所属のF-4Jの尾部。手前の機体は第14空母攻撃航空団（CVW-14）の司令官機。

〔下〕同じくVF-143所属のF-4JファントムII。

韓国空軍の戦闘機

F-5A Fighters of Republic of Korea Air Force.

F-5 A & RF-86F Fighters of ROK A. F.

韓国空軍戦闘機のスナップ集。〔上・右上〕戦術戦闘機F-5Aフリーダムファイター。上は迷彩塗装，右上の編隊は銀塗装で，両翼端にサイドワインダーAAMを装備。韓国空軍では複座練習型のF-5Bを含めて，77機のF-5を装備している。〔下〕これも迷彩塗装のRF-86Fセイバー偵察機。F-86Fの装備機数は110機，ほかに偵察型のRF-86Fを10機保有している。

F-86D Fighters of ROK A.F

〔上・下〕韓国空軍の全天候戦闘機F-86Dのラインアップ。上の写真では迷彩塗装のRF-86Fの1機が滑走中。

(Photos by WORLD PHOTO PRESS)

〔下〕F-86Dの離陸スタート。手前に映っているのは射撃用ターゲット。F-86Dの装備機数は約20機。ほかに戦闘爆撃機F・4Dファントム IIを1個飛行隊18機保有している。

日本各地の航空祭から

このページと次ページは，5月6日の"親善デー"当日に公開された岩国基地の米海兵隊機．これまでに三軍記念日には毎年一
に解放されて各種の記念行事を行なってきた岩国基地．今年は"親善デー"と銘うって，例年のように装備各機を展示した．
〔上〕RF-4Bファントム II．第1海兵混成偵察飛行隊(VMCJ-1)の所属機．〔下〕TA-4Fスカイホーク．第12海兵飛行大
令部付属整備飛行隊(H & MS-12)所属機．

"Friendship Day" Aircraft Displayed at MCAS, Iwak

〔上・右〕第311海兵攻撃飛行隊(VMA-311)所属のA-4Eスカイホーク。同飛行隊のニックネームは"トムキャッツ"。右はそのマークである。

（下）沖縄の普天間基地から飛来したOV-10Aブロンコ。第6海兵観測飛行隊（VMO-6）の所属機。

PS-1 Anti-submarine Flying boat at MCAS. Iwaku

〔上〕岩国基地の"親善デー"には海上自衛隊機も展示された。写真はその1機でPS-1対潜飛行艇の8号機。同基地で新しく発足した第31航空隊に配備されて運用テスト中である。
〔下〕航空自衛隊芦屋基地のT-1Aが，ごらんのような赤い塗装となった。ニアミス防止のために派手な塗装としたもので，同基地の第13飛行教育団のT-1A/Bは，年内にすべてこの塗装となる。

⬇T-1A Advaneed Trainer at JASDF Ashiya base

黒い怪物
ロッキード SR-71
スピードは、マッハ3以上をだす
米空軍の最新鋭戦略偵察機です。
★1/72スケール 全長：45.5cm
全幅：23.5cm
★H-212 ¥600
新発売
USAF
1/144 SCALE
MINI SERIES
レベル・ミニ・シリーズ
世界のベスト28機種
勢ぞろい!!
第1弾！日本機12機種に加えて――
第2弾！アメリカ機8機種、イギリス機4機種、ドイツ機4機種を新発売
★1/144完全スケール ★デカール入り ★スタンド・ネームプレート付
★各機¥60
Revell
レベルカラー

〔上・下〕5月13日に開催された陸上自衛隊木更津基地の航空祭から。上はヘリボーンの実演。KV-107-IIヘリコプタは同基地の第1ヘリコプタ団第1飛行隊編所属。当日の展示機は，航空自衛隊のC-1の参加などもあって多彩であった。下の写真は展示機の一つL-19連絡機。東部方面航空隊の所属機。

KV-107-II & L-19 Displayed at JGSDF Kisarazu Base.

佐世保に入港した「コーラルシー」のファントムII

カタパルト修理のため5月26日に佐世保に入港した「コーラルシー」(CVA-43)のF-4B。手前は第51戦闘飛行隊(VF-51)、後方は第111戦闘飛行隊(VF-111)所属。黒地に赤いNLと「旭日旗」を画いた垂直尾翼。

(PHOTO by H・HAMANO)

曲技飛行の“神様”が操る
ノースロップF-5EタイガーII

パリ航空ショーのデモ飛行にそなえて，エドワーズ空軍基地上空で練習中のF-5EタイガーII。操縦するのはアクロバット飛行の妙手ボブ・フーバー氏。氏はロックウエルの所属だが，パリ・ショーのためノースロップ社が助っ人を頼んだもの。 (Northrop Photo)

初飛行したボーイングT-43A航法練習機

米海軍のC-9Bスカイトレン II

〔上〕米空軍がT-29の後継機として新しく採用することになった航法練習機ボーイングT-43A。ボーイング737-200の軍用型で，昇降扉や窓を減らし，電子機器搭載のために床を補強，後部貨物室に燃料タンクを増設するなどの改造をしている。空軍では19機を発注している。写真はこのほどボーイングのレントン工場で初飛行した1号機。

〔下〕このほど米海軍に引渡された新型輸送機C-9B。C-9Bはマクダネル・ダグラスDC-9-30Fの軍用型。R4Dにちなんで，スカイトレンIIと命名された。

気象観測用のエレクトラ

〔上〕ロッキードがエレクトラを改造してつくりあげた気象観測機。近く米国気象研究センター(コロラド州)へ納入され，国際的な気象観測計画に使用される。機首からのびた“鼻”は長さ19m。飛行機の動きに影響されない乱気流を観測する装置がつめこまれている。

BEAのトライデントⅢB

〔下〕英国ヨーロッパ航空（ＢＥＡ）のトライデントⅢＢ。ⅢＢは乗客140～180座席の中距離旅客機。トライデントの最新型で，ＢＥＡでは現在26機を就航させている。中国が２機発注しているのは，このⅢＢの長距離型，スーパー・トライデントⅢＢである。

テスト飛行に離陸するA-300B

〔上〕エアバスA-300Bのテスト飛行は，完成した原型2型を使ってツールーズのテスト・センターで続行中であるが，両機はすでに300時間以上飛んでいる。今年末までにさらに2機がテストに参加する。A-300Bのこれまでの発注機数は38機。写真は離陸する1号機。

アエロフロートの“DC-3”

〔下〕北極観測基地への中継地ツオコフ島に，食料，油，燃料，日用品などを運んで飛来したアエロフロートのDC-3。DC-3はソ連でもライセンス生産しており，当初はPS-84のちにLi-2と呼んだ。写真の機体は雪上用のソリを付けている。 (Photo by TASS)

カナード翼を開いたTu-144

パリ航空ショーで墜落事故を起し，大きな話題をなげたソ連の超音速旅客機Tu-144。写真は低速時の安定のために，機首に新しく装備した引込式のカナード翼をいっぱいに開いたところ。翼の後縁部は可変キャンバとなっており，これで着速が約20ノットほど減らすことができるとみられていた。パリ・ショーに展示されたのもこの小翼を付けて改造したもので,このほか操縦席内を大幅に自動化し，NK-144エンジンも推力アップ，全天候性能をもたせるためにレーダーを改良するなど，初期の原型とは，各部が大きく変っていた。まもなくアエロフロートの路線に就航，1977年頃には輸出機の引渡しも可能と発表されていたが，今回の事故で，Tu-144計画は先行きが不安となった感じである。
(Photo by TASS)

速報

第30回パリ航空宇宙ショー

5月24日からパリのル・ブールジェ空港で開かれた第30回パリ国際航空宇宙ショー第一報。2年に一度開かれる世界最大の航空の祭典。今年も世界の主要航空機メーカーの軍用・民間機が300機種近くも出品されて、華やかな幕開けであった。しかしこのショーで、もう一つの話題を呼んでいたデモ飛行の事故。今回は最終日、どたん場にTu-144という大物の惨事。ソ連航空界にとって、まったく不運なショーとなった。〔上〕ミラージュF1、G8、IIIなどが並んだ屋外展示場。〔下〕おなじみのBAC167ストライクマスターが、搭載武器とともに。

写真上と右もフランス軍用機のコーナー。ミラージュIII、F.1、エタンダール、ジャガーEなどが見える。

写真上はスウェーデンから出品されたおなじみのサーブ37ビゲン。写真は戦闘攻撃型のＡＪ37だが、会場には複座練習型のＳＫ37も展示された。スウェーデン空軍では最終的にはＡＪ37を175機、SK37を50機装備する計画といわれ、これまでＳＫ37少数機を含めて約80機のビゲンが引渡されている。サーブ社では最近、さらに写真偵察型のＳＦ37、海上観測型のＳＨ37の開発契約を空軍と結んでおり、地道ながら着実にバリエーションを増やしつつあり、海外の航空ショーにも積極的に出品して、ＰＲに努めている。

写真右も地元フランスの屋外展示場。中央に、去る3月末にロールアウトしたばかりの40座席双発ジェット・コミューター機ファルコン30の１号機、右手にはフランス海軍のブレゲー1150アトランチック対潜哨戒機が並んでいる。

今回のショーに出品された航空機では、やや影がうすくなった感じだが、やはりコンコルド、Tu-144の両SSTがスター・クラス。アメリカ勢ではF-14トムキャットとF-5Eがめぼしいところ。P-530のモックアップが展示されて、ブルー・エンゼルスも飛行ショーに参加した。経費節約で意気あがらないアメリカ勢に対して、ソ連は巨大Tu-144のほかIl-76 4発輸送機、Il-62M、Tu-154、Tu-134、Yak-40にMi-10や、Ka-25ヘリまで動員。Tu-144の事故がなかったら物量で圧倒できたショーでもあった。欧州勢でそのほか主なところをあげるとエアバスA-300B原型1、2号機とVFW-フォッカー614輸送機、あとはハリアーとミラージュ・シリーズ。新規開発の機型では、可変翼機ミラージュGSを固定翼にしたミラージュG8Aの実物大木型、ドルニエの3発飛行艇Do-24 '72のモデルなどが人目を惹いた。

写真上は"悲劇の怪鳥"となったＴu-144とＹak-40のソ連民間輸送機群。展示されたＴu-144は、操縦席後方の機首両側に、引込み式のカナード翼をつけた量産型。
写真下はメスメール首相が出席して行なわれた開会式で、超低空をフライパスするコンコルド02。コンコルドは盛んに飛んで、健在なところを誇示した。

写真上もソ連機の展示場。Tu-144、Yak-40、Tu-134、Mi-10、Iℓ-62M、Tu-154と会場を圧している。右側にはBAC167などの軍用機。

写真下はドルニエDo28Dスカイサーバント輸送機で西ドイツ空軍の装備機。スカイサーバントはこれまで195機受注しており、すでに116機を引渡して、さらに現在月産3機の割合いで量産を続行中である。195機のうち西ドイツ空海軍用の軍用型は125機。民間用として輸出にも力を入れており、南アフリカなどに盛んに売り込まれている。

●フィリピン航空基地めぐり ②

スビック湾のエンタープライズ

先月号の"コンステレーション"について、フィリピンの軍港スビックに憩う原子力空母CVAN-65"エンタープライズ"の搭載機。

緊迫したベトナム海域で任務を解かれ閑静かなスビックの岸壁にゆったりと75,700トンの巨体を横たえる"エンタープライズ"。飛行甲板で搭載機の補修・整備によねんのない乗組員たちの表情もおだやかである。

〔上・右〕同艦の戦闘機部隊の一つ第142戦闘飛行隊（VF-142）所属のF-4JファントムII。VF-142"ゴーストライダース"は、1948年の編成。当初はF8FベアキャットVF-193。1950年にF4Uコルセアで朝鮮動乱に出動。52年にF2H-3バンシーを装備してジェット時代の仲間入り。1963年までにF3H-3デモンも乗りこなしている。

同年7月にF-4BファントムIIに機種改編。10月にVF-142に名称が変った。64年8月に"コンステレーション"でベトナム戦に初出撃。65年10月には、"レンジャー"で再度ベトナムに出撃。67年5月の3回目の出陣では、北爆出動121回。MiG-21を2機、MiG-17を1機撃墜している。1968年5月に4回目のトンキン湾出動。69年8月にF-4Jに機種を変えて5回目。1971年2月に現在の"エンタープライズ"乗組みとなって、6月に6回目、そして昨年9月に7回目と、VF-142はベトナムの戦じんにまみれた歴戦の戦闘部隊である。

〔上〕飛行甲板上のA-7EコルセアⅡとA-6Aイントルーダー。コルセア部隊は第27攻撃飛行隊（VA-27）"ロイヤルメーセス"と第97攻撃飛行隊（VA-97）"ウォーホークス"。A-6Aは第196攻撃飛行隊（VA-196）"メインバッテリィ"の所属機。

〔下〕VA-196"メインバッテリイ"のA-6A。主翼端の上下に開くスポイラが作動状態になっているのに注意。

〔右ページ2枚〕RA-5Cビジランテイ電子偵察機。第13偵察攻撃飛行隊（RVAH-13）"バッツ"の所属機。上の写真では、特徴ある"エンタープライズ"の艦橋が澄みきった空にくっきりと浮かんで見える。

613
212
13
NK
158037
USS ENTERPRISE
NAVY
VAQ-131

〔左ページ上・下〕4座の電子偵察機EA-6Bプラウラーの機首と尾部。垂直尾翼先端のふくれあがったALQ-99アンテナ収容部側面のECM受信アンテナのふくらみなどがよくわかる。〔同中〕翼端スポイラーのクローズアップ。EA-6Bは第131電子偵察飛行隊（VAQ-131）の所属機である。〔上・下〕飛行甲板上の各機。下の写真にはE-2Bホークアイ（VAW-13・第13早期警戒飛行隊）も見える。

ＸＴ-2の射爆撃テスト

ＸＴ-2の"第１次武装射爆撃試験"が去る５月22日から６月９日にわたって、三沢射爆訓練所で行なわれ、報道関係者たちに公開された。試験機はＸＴ-2の２、４号機機関砲、爆弾、ロケット弾それに外部搭載品の空中発射や投下、投棄の場合の機体に与える影響を確認するためのもので、２号機には750ポンド訓練弾４発、４号機には2.75インチ・ロケット訓練弾ポットを４基主翼下に装備してテストされたが、ここの写真はその模様である。

〔上〕ロケット訓練弾装備の４号機(手前)と訓練爆弾を懸吊した２号機。〔下〕750ポンド訓練爆弾を装備して発進前の２号機。25ポンド爆弾の投下、20ｍｍ機関砲の発射テストも行なわれた。

20mm M61バルカン砲の発射

ロケット弾の発射

同じくロケット弾発射

投下される750ポンド爆弾

砂けむりをあげるロケット弾

（上）主翼下の750ポンド訓練爆弾と（下）2.75インチ・ロケット弾19発が入るポッドのクローズアップ。

XT-2前胴下の記録カメラ・ポッド

［左上・上］去る５月13日の陸上自衛隊木更津基地航空祭でデモ飛行を行なったＯＨ-６とＫＶ-107-IIヘリコプタ。ＯＨ-６は新しく編成したアクロバット飛行チーム所属。同航空祭は、航空自衛隊のＣ-１、米海軍のＰ-３、民間のサイテーションなども出場して盛況であった。［右・下］去る５月初め、東京新宿の伊勢丹で開催されたブラジル展には、同国の“鳥人”サントス・デュモンが製作した世界最初の単葉機“デモアゼル”の実物が展示された。デュモンは飛行船、飛行機の研究に青春を捧げ、自から製作した飛行機が軍用に使われたことを知って自殺した平和の“鳥人”であった。

スナップ だより

(上) 5月12日に東京国際空港に飛来したチリ空軍のロッキードC-130E。同空軍第40スコードロンの所属機。16時10分に上海から飛来したが、パーキング・スポットがないため、18時に入間基地に向けて離陸。17日8時にふたたび羽田に飛来、9時にウェーキ経由で帰国。機首にキウイのマーク、垂直尾翼に紺地に白の星を画いている。(横浜市・笹野強一)

(上) 5月8日、ユーゴ連邦議会議員団一行を乗せて東京国際空港に飛来したユーゴスラビアのIℓ-18。(東京都・北原則
(下) 5月7日にワルシャワ交響楽団の一行を乗せて東京国際空港に到着したLOTポーランド航空のIℓ-62。同機の来日は初めてである。(東京都・佐藤潔)

ボーイング B-17 フライング・フォートレス

BOEING B-17 FLYING FORTRESS

〔上〕ドイツの爆撃に向かうB-17Fの編隊。第8空軍の第91爆撃大隊(91st BG)第322爆撃中隊(322nd BS)所属機。中央の"デルタ・レベル"(Delta Rebel)機は，のちに俳優のクラーク・ゲーブルが観測任務に乗った機体でもある。〔下〕同じく第8空軍第384爆撃大隊(384th BG)第544爆撃中隊(544th BS)のB-17F"リトル・アメリカ"機。

BOEING B-17 FLYING FORTRESS

ボーイングB-17G。欧州戦線で活躍した第381爆撃大隊（381st BG）第532爆撃中隊（532nd BS）の所属機。

〔上〕イギリスのリジウェル近郊の農地上空をドイツに向かって進撃するB-17F。ニックネームは"ウインサム・ウイン"(Winsome Winn)。第8空軍の第381爆撃大隊（381st BG）第534爆撃中隊（534th BS）所属機。1943年8月31日の撮影。　（USAF Photo）

〔下〕北アフリカのビスクラに放置されたB-17F。飛行不能となって，部品や機体各部を，ほかの機体の修理補給用にとりはずしたもの。1942年12月31日の撮影。左側の機体には"リトル・エバ"〈Little Eva〉のニックネームがつけられている。(US ARMY Photo)

↑↓B-17F。初期の頃のもので、オリーブドラブとニュートラルグレイの塗装。下の写真の機体は[illegible]

230060

〔上〕1944年12月，D.H.コノリイ少佐一行の視察を受ける“シルバー・フリート”。手前のB-17F“シテイ・オブ・テヘラン”（City of Teheran）は人員輸送用に改造したもの。左側に“シテイ・オブ・バンダーシャバー”，“シテイ・オブ・アバデン”などのニックネームのC-47が並んでいる。

の群れ。急増のエプロンにあふれている。1944年4月13日の撮影。（US ARMY Photos）

①

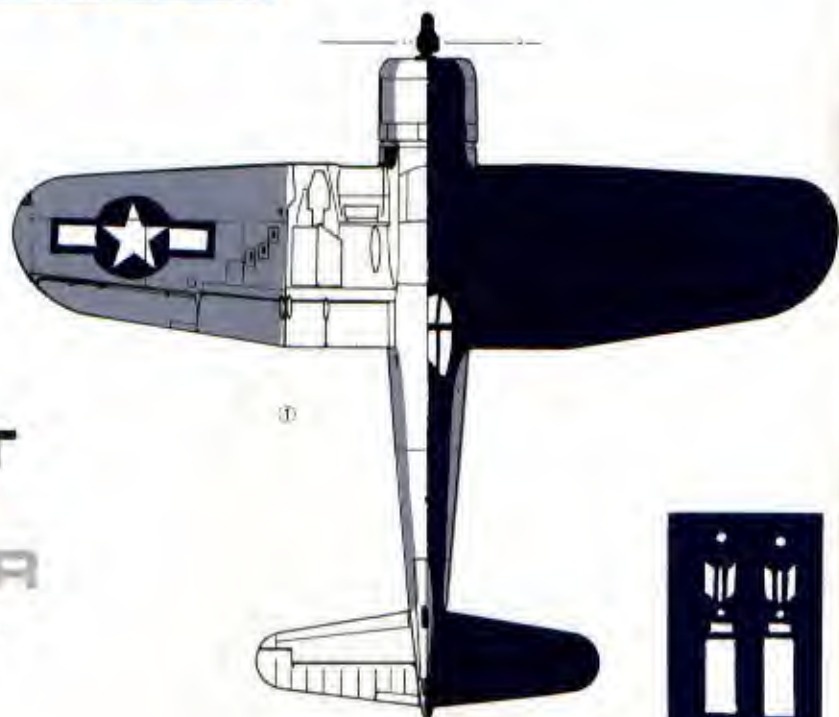
VOUGHT F4U-1D CORSAIR

1/32 SCALE KIT

122

④

②

③

①④ F4U-1D，第4海兵航団第111海兵戦闘中隊"デビルドッグス"所属機。
VMF-111 "Devil Dogs" 4th Marine Air Wing.

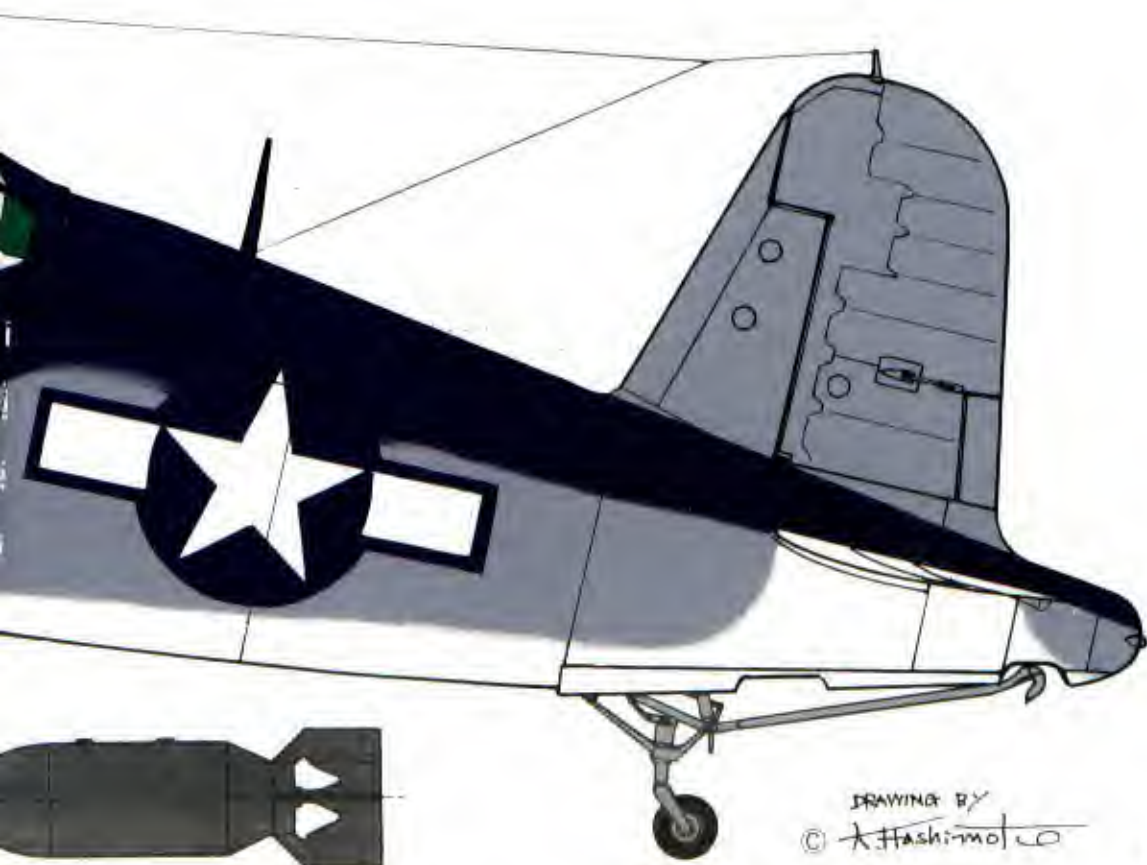
② F4U-4，海軍予備航空隊所属機。
US Navy Reserve.

③ F4U-1D，第212海兵戦闘中隊のC.デロング大尉の乗機。
Capt. C. Delong, VMF-212.

DRAWING BY
© A.Hashimoto

ハイモデリングのための
レベル資料集

F4U-1 コルセアのバリエーション

ENJOY F4U-1 CORSAIR VARIATIONS

☆キットについて☆

レベルから発売されているF4Uコルセアのキットは1/32のビッグモデルを筆頭に1/72スケールのF4U-1，1/48シリーズのF4U-1の3種があり，いずれのキットも実感のでた素晴しい仕上りを示すものである。特に1/32スケールのキットは決定版といえる正確な考証がなされている秀作でエンジンを内蔵し詳細なコクピットをもつデラックス版である。

☆　☆　☆

F4U-1Dのキットをもとにしたバリエーションとして，図①と④に示してあるVMF-111所属機を作ってみるのも楽しめる。塗装は胴体の背部と翼上面がシーブルー（ネービーブルー⑭）で，側面と垂直尾翼がインターミディエイトブルー（ブルグレーにスカイブルー⑭と少量の赤を混色），下面はつや消しの白（少しグレーがかっている白），外翼下面はインターミディエイトブルーという3色迷彩機。胴体左面にある合計100個のスコアマークがポイントで，クローズアップ図のような爆弾の図案がずらりと記入されている。

機体の改造は主翼下面へ爆弾架を自作して取付けて，爆弾をセットすればよく，爆弾は図に示すような形で，この図原寸大で1000ポンド爆弾となる。第4図は1/32スケール。この機体の場合は増槽は不要であるが，1/72スケールの増槽を自作する場合の参考として記入してある。

図②　F4U-4の後期型で1型とほとんど同じ機首をもつ機体。カウルフラップが等分割になり，ややカウリングが長く，尾輪引込部の後部にふくらみが付いているのが1型との差であるから改造してみると後期型を作ることができる。塗装は全面つやのあるシーブルー⑭＋クリヤー45，主翼右上面に52Sの白文字がありSの文字は52より大きく記入されている。

図③　F4U-1D　増槽を自作してやると他の機体と差がつけられてバリエーションが楽しめる機体。塗装は全面がシーブルー⑭でスピナと主翼の銃口部上下面が白。左胴体に記入されているスコアマークは日本海軍の軍艦旗で11個半が記入されている。キャノピの左下にパイロット名らしい文字があるが判読できない。国籍マークは左翼上面と右翼下面のスタンダードタイプである。

また機体によっては図のようにロケット弾8発を装備したものもあるから，主翼下面へロケット弾架を付けて，ロケット弾を自作し，モデルの仕上りに個性をもたせる方法もある。　　〈イラストと解説——橋本喜久男〉

データ〈F4U-1 technical data〉

全幅〈span〉12.48m，全長〈length〉10.27m，全高〈height〉4.5m，全備重量〈gross weight〉5,686kg，発動機〈engine〉P&W R-2800-8〈2,000HP〉×1，最大速度〈max. speed〉670km/hr/6,070m，実用上昇限度〈service ceiling〉11,200m，武装〈armament〉12.7mm×6，乗員〈crew〉×1。

写真は図①と④に示す第111海兵戦闘中隊（VMF-111）"デビル・ドッグス" 所属の１機で，写真のようにフリーハンドで出撃のたびに記入されたスコアマークがポイントとなる機体。スコアマークは，案外不そろいに記入されている。翼上面の人物がパイロット。

ENJOY F4U-1 CORSAIR VARIATIONS

Three different size F4U-1 kits, 1/32, 1/72 and 1/144 scale, are now on sale from Revell. All excellent finish. Especially, the 1/32 scale kit is the gem of this old American plastic model manufacturer. Its correct research is highly valuated by kit specialists all over the world.

* * *

Figs. 1 & 4. In order to fully enjoy color variations of this famous WWII heavy fighter, I (K. Hashimoto) recommend you, kit fans, to build the plane of VMF-111 as shown in the drawings in Figs. 1 and 4. The fuselage upside and the wing upper surfaces are sea blue or Revell Color (RC) 14, Navy blue, and the fuselage sides and the vertical tail are intermediate blue (which can be made by mixing blue gray with a little amount of RC-34, sky blue). The undersides are non-glare white (tinged with glay). The undersides of the outerwings are intermediate blue. Highlighted are the mission data or the score markings on the left side of the fuselage. A total of 100 bomb-marks are in a row as shown in the drawing.

It is recommended that you make bomb rack youself and set your hand-made bomb. Shown is the 1,000 pound bomb to fit the 1/32 scale kit. In this case, there is no need to make drop tank. Drop tank shown in the drawing is just for your information, in making a drop tank.

Fig. 2. This is the latter version of the F4U-4. Only difference from the F4U-1 is that the F4U-4's cowling-flap is equally devided, the cowling is a little longer than that of the F4U-1 and there is a bulge for the tail wheel. Totally painted in RC-14, sea blue plus RC-46, clear. On the upper surface of the right wing are letters reading "52S" in white. The letter, "S" is larger than "52" in size.

Fig. 3. F4U-1D. It is recommended that kit fans make yourself dropping tanks, so that you can enjoy variations, difference from other machines. Totally painted in RC-14, sea blue. The spinner and the muzzle part of the main wings are white. The mission data or the score markings are patterned after the Japanese Imperial Navy flag. Letters seen on the leftside of the canopy seems to be the pilot's name, but hard to read.

The national insignia, the standard type, is on the upper surface of the left wing and the lower surface of the right wing. Some are equipped with eight rockets. Therefore, you can enjoy the variety of the plane by hand-making rockets. (Drawing and Commentary by K. Hashimoto)

F4U-1Dコルセア。テキサス州の同好会"ゴースト・スコードロン"が持っている1機で，第2次大戦の戦闘部隊所属らしき塗装にしているが，正確にはこのような塗装の機体はなかった。しかし現在でも飛んでおり，感じをつかむには好個の材料。

未発表陸軍機写真集　4式戦闘機　疾風

Ki.84 Hayate　Fighter

群馬県の館林飛行場に集結した4式戦闘機疾風。昭和20年、特攻攻撃のために訓練中の振武特攻隊の所属機で、近くの中島の工場から到着したばかりの新しい疾風である

昭和20年5月から終戦にかけて、館林飛行場には本土決戦にそなえて疾風と100式司令部偵察機50〜60機が温存されていた。日本本土に進攻する艦船をめざして突っ込む振武特攻隊12個隊の装備機であった。各隊はそれぞれ6機編成、「皇魂隊」「朝霧隊」「忠義隊」「深山桜隊」「正気隊」……と自から称した。殉国の志に燃える若鷲たちは出動の命を待って最後の訓練に精進した。しかし、出撃命令はついに発せられなかった。そして終戦。飛行場の周辺に遮蔽されていた飛行機はすべて引き出されて、プロペラがはずされた。

写真はその終戦直後の館林振武特攻隊機。手前は4式戦闘機疾風、後方に100式司令部偵察機が並んでいる。左前方の1機は尾翼のマークから第184振武隊所属機、その右後方は第183振武隊所属機と思われる。

PROPELLER-OFF DISFIGURED are the Japanese Army airplanes retained at an airfield near Tokyo to the last moment of the Pacific War as Japan's last resort to repel the "invaders" and defend the Japan mainland.
Around May of 1945, some 50-60 "Hayate" and Type 100 Command Reconnaissance airplanes with daring pilots were concentrated at Tatebayashi Army Airfield, Gunma Pref., to organize the "Shimbu" (pluck-up-courage) Air Command.
Each of the 19-unit command was composed of six airplanes. Full of the spirit of patriotism, young soldiers called their unit, "Yugi-tai" (eternal loyalty), "Kiryu-tai" (knight-dragons), "Seigi-tai" (sincerity), "Miyama-Sakura-tai" (cherries) and so forth. The war ended before giving them any chance of fighting.
Pictured just this side is Type 4 Fighter, Hayate, and beside the Hayate is Type 100 Command Reconnaissance.
The tail marking of the one in the leftside front shows it belonged to the 184th "Shimbu-tai", and the right backward to the 183rd "Shimbu-tai".

【上・下】これも同じく終戦とともに館林飛行場に集められた振武特攻隊機。館林の振武隊19個隊のうち，終戦までに九州への進出が決ったのは第183振武隊，第184振武隊，185振武隊「悠翔隊」，第190振武隊「殉翔隊」の4個隊。すべて100番台の4式戦疾風装備部隊で，尾翼に新しく部隊マークを画き，いつでも移駐できるように整備をととのえて待機していた。

上の写真で左側の2機は、尾翼に白い鳥のマークを画いた第185振武隊「悠義隊」の所属機と思われる。100式司偵装備の振武隊は200番台の番号で、館林には第230振武隊「白梅隊」、第229「絶忠隊」、第231「瑞穂隊」などが編成されていた。上の写真の疾風には落下増槽を吊した機体も見えるが、遠距離の特攻攻撃は片翼に増槽、片翼に250kg爆弾1発の装備、近距離の場合は、両翼下に250kg爆弾を1発ずつ吊すことになっていた。

〔左〕館林飛行場で訓練中の振武特攻隊の疾風。特攻訓練は、敵機の空襲のあいまをぬってつ鹿島灘沖などの海上で行なわれた。

上〕これも館林飛行場わきで武装解除された4式戦闘機疾風の1機。尾部のマークから第183振武隊所属機と思われる。館林
島の航空機工場に近く、大戦末期には完成したばかりの機体が運び込まれて、本土決戦にそなえて温存された。〔下〕戦後ア
カに運ばれた日本機。中央は疾風を木製化したキ106、その後方に紫電改、強風なども見える。ノーフォーク海軍基地にて。

鹵獲したカーチスP-40Eと

Captured U.S. Army Warplanes photographed at the Philippine Airfield

緒戦に優勢であった日本軍は、中国大陸や南方戦線で、A-20、B-25、B-17などの爆撃機、バッファロ、ハリケーン、P-40といった戦闘機を鹵獲して、徹底的な調査研究を行なっている。とくに"空の要塞"として当時日本にもよく知られていたB-17、開戦早々から日本の陸海軍機と盛んに空戦したP-40の収得は、その後の日本軍の空戦戦術、新鋭機開発の上で得るところが大であった。

ここのシーンはフイリピンのクラークフイールドに集められた鹵獲機、ボーイングB-17D、カーチスP-40Eそれにバッファロ戦闘機である。日本に向けて空輸されるところで、胴体に日の丸を画いたP-40Eは、エンジンを始動してつぎつぎに発進。B-17Dは放置された数機の部品を組み合わせて完成したものだが、P-40Eは船積みされて運び込まれたばかりの新品で、梱包のままで鹵獲したものという。上の写真は尾翼に番号を書いた4機のP-40E、その後方にB-17Dの巨体、さらにそのうしろにバッファロが見える。

ボーイング　B-17D

（本文記事参照）

1機また1機と滑走路に向かうP-40E。ここに映っているP-40Eは4機であるが、日本に運び込まれたのは1個中隊にも相当する10数機。隼や鍾馗などと模擬空戦なども行なって、その性能を徹底的に調べあげているが、一撃離脱戦法などは、本機を参考にして本格的に学ぶことになったともいわれる。強力な火器、操縦席や燃料タンクの防弾装置などは、とくに注目された。

下の写真でB・17Dの後方のブリュスター・バッファロのシルエットがよくわかる。日本の戦闘機の前にはもろかったバッファ
時代遅れの戦闘機として、日本側でも本機にはあまり参考にする点もなかったようであるが、唯一つ、アメリカの飛行機とし
は珍らしく操縦法がやさしく、誰にでも乗りこなせるクセのないの戦闘機であることは認めている。

P・40Eが飛び去ってあとに残ったB・17Dとバッファロー。B・17はD型が3機、E型1機が日本内地に空輸されている。当時
の超重爆として広く宣伝された機体だけあって、本機に対しては日本側でもとくに念入りな調査を行なっている。優れた高空性
堅固な防弾装置、強力な武装、精密な爆撃照準装置、大型のわりに操縦がやさしく、乗心地が良好で快適。"空飛ぶ戦艦の威力なきに
しもあらず"と、当時の日本の関係者にとっては驚嘆すべき爆撃機であった。

フェアリー　バトル ①

フェアリー　バトルは、イギリス空軍で最初の低翼単葉引込脚の軽爆撃機。機材の近代化をめざす1930年代後半の空軍整備拡張政策にもとずいて装備されることになった新型機の一つ。それまでの主力軽爆であった複葉のホーカー　ハートやハインドにくらべて、スピードや爆弾搭載量がいっきょに2倍となり、外形もスマートな3座の軽爆であった。

1937年5月から爆撃航空隊の各スコードロンへの配備が開始されたが、このころは世界の空軍がこぞって機材の近代化に力をそそいだ時代。新鋭機がたてつづけに登場して、そのわずか2年後、2次大戦が開始されるころはもはや旧式機。とくに馬力不足でスピードが遅く、脆弱な防御火器は、近代の航空戦を闘いぬくためには致命的な欠陥であった。1940年9月まで爆撃航空隊の第一線機であったが、活躍したのは緒戦のわずかな期間であった。写真〔上〕1936年3月10日に初飛行したバトル原型1号機。マーリンIエンジン（1,030 HP）装備。〔下〕マーリンIIエンジン装備の量産型の1機。

〔上・下〕前進航空攻撃軍団（ＡＡＳＦ）の爆撃部隊に配備されてフランスに派遣されたバトルⅠ。手前はフランス空軍のアミオ 143 爆撃練習機。ＡＡＳＦのバトルは、1939年９月２日開戦前夜には、爆弾を積んでいつでも出撃できる態勢にあった。

〔右上〕バトルは1940年９月まで生産がつづけられ、総生産機数は 2,185 機。そのうち 1,029 機はオースチン自動車工場製である。写真の機体もオースチン製の１機で、ブレイトン基地航空隊の所属機である。〔右中・下〕２枚ともフランス戦線のＡＡＳＦ爆撃部隊のバトル。左側に映っているのはフランス空軍のＭＳ406戦闘機。

ＡＡＳＦは陸軍の支援を任務としてフランスで編成されたイギリス空軍の派遣航空部隊。開戦のころバトルは約 1,000 機が爆撃航空隊に装備され、約15のスコードロンを編成していたが、その10個スコードロンはこのＡＡＳＦ部隊としてフランスに送られていた。開戦当初は偵察任務に動員され、９月10日の初出撃以来、第 150、103、88、142スコードロンの各機が仏独国境線に飛んでいるが、30日に第 150 スコードロンの５機のうち４機がドイツ空軍の戦闘機に撃墜され、その後５月まで昼間出撃は禁止された。

〔上・下〕同じくＡＡＳＦの第218スコードロンのバトル。フランス上空を編隊飛行中。ＡＡＳＦのバトルは、5月に入ってふたたび出撃を開始したが、相変らず被害は大きかった。5月10日に出撃した22機のうち20機が還らず、翌日の11日に出動した8機も7機が撃墜されるという手痛い打撃を受けた。特に14日にＡＡＳＦのバトルとブレニムの総力をあげて決行されたセダンのドイツ軍仮橋の爆撃では、71機中40機が未帰還というイギリス空軍史上でもかつてない被害であった。その後のバトルは、小規模の夜間出撃に駆り出されたにすぎなかった。

エアラインの翼

BOAC　英国航空　⑪

〔上〕1960年12月から大西洋空路に就航したボーイング7
-436。-436はＢＯＡＣ向けで、-300標準型のＰ＆Ｗ　Ｊ
４Ａ３（15,800ℓb）エンジンをロールスロイス　コンウ
イ508（17,500ℓb）にかえたもの。16機を発注、現在も
の数を保有している。写真の機体（-ＡＰＦＢ）は１号機。
下〕71年４月から大西洋線に飛んだボーイング747 ジャ
ボ・ジェット。現在は13機を保有しているが、年内に２
入って、15機となる。そのほかＢＯＡＣの現在の保有機
、707-336Ｃが９機、707-336Ｂが２機、ＶＣ-10が11機、
ーパーＶＣ-10が16機で、コンコルド５機を発注している。